令和6年度　学校評価報告書　　田村市立船引南小学校

経営理念	船引南地区学校運営協議会目標　豊かな心と確かな学力を身に付け、夢に向かって取り組み続ける子どもの育成 船引南小学校教育目標　（夢）　目標をもって自ら学ぶ子ども （愛）　さわやかで、思いやりのある子ども （自立）健康で、たくましくやりとげる子ども

経営目標		評価項目	自己評価			学校関係者評価		改善策等
			達成状況	評価	改善策案	考察	評価	
夢	○目標をもって自ら学ぶ子ども	①難しい問題に取り組んだり積極的に話し合い活動に取り組む意欲を育成する。	体育の授業に運動身体づくり運動を取り入れたり、年間を通しての体育的行事を全校的に実施したりして、運動量の確保に努めたが、高学年では昨年度よりも若干低い運動能力指標だった。	C	体育の授業を主に児童の「好きな運動」を増やしていく取組を継続していくとともに、家庭と連携して１日６０分以上の運動の時間の確保を目指す。	コロナ禍での制約等がある中、児童が学校において一生懸命に運動に取り組んでいることは素晴らしい。また、同レベルの運動が身体的に可能な児童ばかりではないので、大切さを理解させ、個々に合った目標を持たせてはどうか。	B	運動による健康な体づくり心づくりの観点から主体的に運動できる環境と機会づくりにさらに努め、児童個々に目標を持たせていく。
		②家庭学習の習慣を身に付けさせる。	外部講師による食育や歯磨き指導を実施したり児童会による推奨もあり、８割以上の児童が苦手なもの以外は残さないで食事をしている。また、８割以上の児童が毎食後に歯磨きをしている。	A	食事に関しては、保護者に給食のメニューを紹介したり、試食会を設けたりしていく。歯磨きに関しては、歯みがきの仕方の質的向上を目指して保健指導を充実させていく。	給食を通して学校と家庭が連携して食育にあたることは大事である。また、歯磨きの習慣が身についていることは、家庭と学校の指導がうまくいっているからである。	A	児童の学校生活における給食や歯磨きの場面を捉えて、意識づけと質的向上を図る指導を行い、家庭と連携した取組を継続することで、さらに健康意識を高めていく。
		③読書の習慣を身に付けさせる。	メディアに触れる時間は児童の８割以上が１日３時間以内であった。その際には時間や目からの距離、姿勢などが心配されている。また、毎日８時間以上の睡眠時間の確保は８割以上の児童が達成できている。	B	「ノーメディア・デー」の徹底については、児童へは児童会から呼び掛け、保護者へは睡眠の大切さについてお便り等を通して啓発したりしていく。	「ノーメディア・デー」については、家庭が主体となって親子共々に取り組むことで実施率を高めることになると思われる。	B	「ノーメディア・デー」の徹底については、家庭へ対策事例を紹介しながら働きかけたり、児童に達成可能な短期目標を定め、振り返ったりさせる取組をしていく。
愛	○さわやかで、思いやりのある子ども	④進んで気持ちのよいあいさつができるようにする。	「学び合いのある授業」「ICTを活用した授業」を現職教育の研究視点として授業改善に向けて取り組んできたところ、多くの児童もこれらが分かりやすい授業であると捉えていることが分かった。	A	分かりやすい授業を学力向上につなげるために、児童が「①教師の話を聞く。②自分の考えを伝える。③分からないことは質問する。」ことができるよう、「授業スタンダード」の活用を図る。	ICTの活用や友達との話し合いによる授業が分かりやすいと感じている児童が多いことから、学力の向上につながる手法だと感じる。	A	学び合いのある授業、ICTを活用した授業、TTによる授業、コース別学習など学習意欲を高める手だてを工夫し、学力向上の視点からの実践的研究を進めていく。
		⑤学校や家庭・社会の決まりを守ることができるようにする。	児童の４割弱が自分の考えを発表し、分からないところを質問していることが分かった。これらは、授業でできないところや分からないことをなくすために努力しているこが推測できる。	B	授業でできないこと・分からないことをなくすために、少人数指導のよさを活用しながら個別最適な学びと協働的な学びを適切に実現していく。	授業・学習に対する姿勢は、昨年度に比べてレベルアップしている。授業での疑問点解消は口頭による質問だけではなく、不得手な児童や消極的な児童への対応を考えていく必要があると思われる。	B	基礎基本の定着に向けて、児童が「自分の考えを発表したり、分からないところを質問したりする」ことの達成基準を設定し評価するとともに授業スタンダードを活用した授業改善に取り組む。
		⑥思いやりをもち相手のことを考えて話を聞く姿勢を育てる。	８割以上の児童が、自主的に家庭学習に取り組んでいるが、その中で２割弱の児童が家族の誰かに言われて学習していることが分かった。	B	学校では、「ふくしまの家庭学習スタンダード」を活用して、児童の自己マネジメント力を身に付けられるよう、児童に指導し、保護者に啓発していく。	宿題であっても、毎日一定の時間学習することが、知的能力や自主性を高めていく。学校側としては、宿題の出し方について様々な工夫をこれまで以上にすることで、児童の学習時間を質量共に拡充できるのではないか。	B	学校全体で共通理解のもと教職員で設定した家庭学習の仕方を徹底指導するとともに、保護者と「学習の手引き」を共有し、家庭において自ら学習する自己マネジメント力を身に付けさせる。
自立	○健康で、たくましくやりとげる子ども	⑦決まりを守ってソーシャルメディアを使ったり規則正しい生活を送ったりする習慣を身に付けさせる。	９割以上の児童が挨拶することができるが、自分からあいさつをするには至っていない。また、児童は、自分のことを優先することが多くて相手に思いやりをもって接することが難しかった。	B	児童が自分から進んであいさつしたり思いやりの行動をしたりするために、特別の教科道徳の授業を核にした指導をしていく。	小学校段階では、焦らずに挨拶の意味や人間関係構築力をじっくりと理解させていくことができればよい。思いやりの心は評価できるので、これまでの指導をさらに継続していってほしい。	B	言葉によって感情を伝えることの大切さについて、国語の授業をはじめ学校生活全体を通して、指導していく。
		⑧好き嫌いをしないで食事をとることができるようにする。	友達と一緒であれば日直や係の仕事は、忘れずに行い、他の仕事も気付いて活動できるが、自分一人では難しい面もある。	B	体験活動を行う際には、協働的な場面を設定し、役割を明確にしたり、称賛したりするようにする。	小中一貫教育校のよさを生かした教育活動を展開する中で、自己肯定感や他者肯定感を育成していくことが望まれる。	B	学校地域支援本部との連携により、体験活動の機会を設けるなど、小中一貫教育での関わりを通して、対人関係の在り方や自信をもって行動する大切さを学ばせる。
		⑨目標を決めて運動に取り組む意欲を育てる。	まち探検をしたり、学習ボランティアの支援を受けながら学んだりすることを好意的に捉えている児童が多いことが分かった。	B	積極的に教育課程に位置付けて、計画的に交流活動を実施していく。	家庭と学校の協働、幼小中の連携が生きるところである。あらゆる場面でボランティアを活用する等、地域も巻き込み、心を育てるのもよいのではないか。	B	今年度と同様に学校地域支援本部との連携を取りながら、学習ボランティアや地域の人材を活用した授業を展開していく。
全般		⑩子どもの相談に親身になって対応しいじめのない学級づくりに努める。						
		⑪保護者や地域の要望にに応え連携を密にする。						

【評価基準】A:十分満足　　B：おおむね満足　　C:もう少し努力が必要　　D:大いに努力が必要　　※学校関係者評価は学校運営協議会委員による